

# 和歌山市の文化財を活かした歴史体感プログラム

富永 里菜（和歌山市産業交流局文化スポーツ部文化振興課）

## 1. はじめに

和歌山市では文化財への来訪者に生きた歴史の体感・体験を提供し、文化財への理解を深めて付加価値を高めていくため、令和元年度から、文化庁の補助事業「Living History（生きた歴史体感プログラム）」促進事業を活用し、「和歌山市の文化財を生かした歴史体感プログラム事業」を実施している。プログラムの内容は、史跡和歌山城を舞台として、紀州徳川家関係の歴史資料をもとに江戸時代の様子を再現・実演する取り組みである<sup>1)</sup>。

和歌山城は、紀ノ川下流域の平野部の中心に立地し、その周辺には江戸時代から城下町が発展した。城の壮大な石垣や堀は、御三家紀州徳川家にふさわしい威容を誇る。昭和初期に国宝に指定された天守は惜しくも太平洋戦争の戦災で焼失したが、市民の寄付等により再建され、ランドマークとして親しまれてきた。しかしながら、和歌山城については、戦災等で建造物がほとんど残存しないことや、紀州徳川家関係の伝存する資料が多くないこともあり、VR映像での工夫等はあるものの、江戸時代の様子を豊かにイメージできる状況ではない。和歌山市内の観光の中心の一つでもある和歌山城で、歴史体感プログラムを実施することにより、まちの魅力として更なるまちの活性化を図るものである。

## 2. 史跡和歌山城について

天正13年（1585）、紀州を平定した羽柴秀吉が弟の秀長に命じ、岡山（虎伏山）に創建させたのが和

歌山城である。その後、桑山氏が城代となり、慶長5年（1600）には浅野氏が入国し、連立式天守を建造して、本町通りを大手筋とするなど、大規模な城郭と城下町の整備を行った。元和5年（1619）、徳川家康の10男頼宣が紀伊国に入国し、さらに二の丸・砂の丸・南の丸の整備が行われ、和歌山城はほぼ現在の姿となった。

明治維新後も政治庁が置かれるなど、和歌山城は依然政治の拠点であったが、廃藩置県後は軍用地となり、明治34年（1901）、和歌山県は城地を陸軍省から借用して和歌山公園として公開、さらに同44年には和歌山市へ払い下げられた。昭和6年（1931）には、文部省から史跡指定された。

嘉永3年（1850）に再建された天守閣は明治維新後にも残り、昭和10年（1935）には国宝に指定されたが、同20年7月に空襲で焼失した。現在の天守閣は、同33年に鉄筋コンクリートで再建された。



図1 史跡和歌山城概要  
『史跡和歌山城整備計画報告書－平成28年度改訂版』  
平成29年3月、和歌山市産業まちづくり局観光国際部和  
歌山城整備企画課 より転載

岡口門は昭和32年（1957）に重要文化財として、西之丸庭園は昭和60年（1985）に名勝として、それぞれ国指定文化財に指定されている。

城地は現在、和歌山城公園として市民の憩いの場となっている。また毎年恒例のイベントとして、1月第2日曜日に「和歌山市消防出初式」、3月下旬～4月中旬に「桜まつり」、8月第1土曜日に「紀州踊りぶんだら節」、10月中旬に「まちなかキャンドルイルミネーション・竹燈夜」、「和歌山城市民茶会」等が行われる他、様々なイベントに活用されている。

今回のプログラムでは、城内で江戸時代の装束・道具の展示・体験を行うとともに、既存のイベントと合わせて実演・活用し、相乗効果を期待している。

### 3. 紀州徳川家関係資料について

『南紀徳川史』は紀州徳川家の歴史書であり、明治維新後に紀州徳川家当主・徳川茂承の命によって、旧紀州藩士・堀内信が明治21年（1888）から同34年（1901）にかけて編纂を行った。同32年に前集70巻の淨書2部が完成、同34年には後集100巻が完成し、紀州徳川家へ納められた。これを南紀徳川史刊行会が昭和15年（1930）3年かけて翻刻刊行し、戦後には昭和45年（1970）から2年かけて復刻刊行した<sup>2)</sup>。

今回のプログラム作成にあたっては、和歌浦の東照宮所蔵本<sup>3)</sup>と、その写しである松坂市所蔵本<sup>4)</sup>、及び東京国立博物館デジタルアーカイブ<sup>5)</sup>で公開されているものを参照した。

このうち、大名行列については、「卷之百四十六 典礼第二 御登城御参詣及び御行列ニ関スル図式」の「御拝領御駕籠」「御挟箱」「同歩行御供服装」「御駕之者」、及び「卷之百四十九 服制第三 服飾図式」の「御駕籠之者看板」等を主に参照した。その他、紀州徳川家の行列図である「紀州藩参勤交代行列図卷（堺市立博物館所蔵）」、「徳川斉順帰国行列図（和歌山県立博物館所蔵）」、「紀伊公岡崎駅御通行行列図卷（和歌山市立博物館所蔵）」等を参照した。



図2 『南紀徳川史』「卷之百四十六 典礼第二 御登城  
御参詣及び御行列ニ関スル図式」御拝領御駕籠  
(松坂市所蔵・提供)

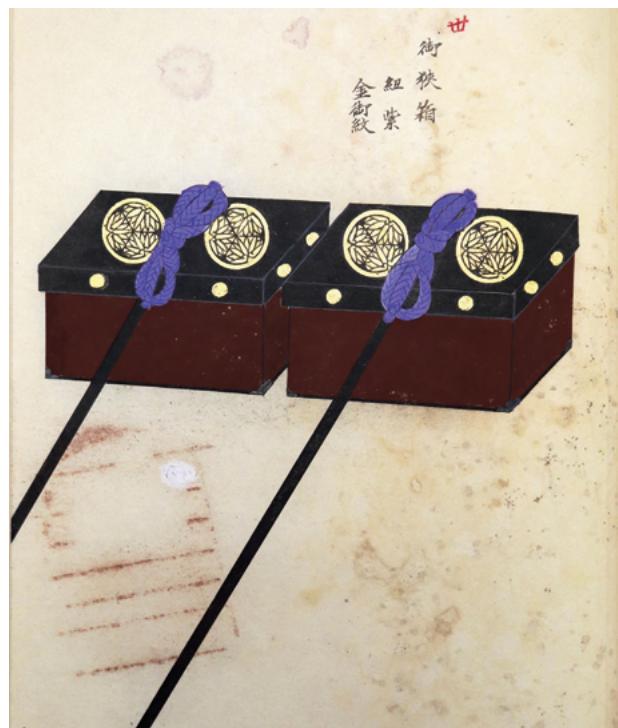


図3 同 御挟箱



図4 同 歩行御供服装 図5 同 御駕籠之者

また駕籠については、『南紀徳川史』所載の御拝領御駕籠に類似する現存の大名駕籠（男乗物）として、「津山藩松平家所用男乗物（津山郷土博物館所蔵）」等を参考とした<sup>6)</sup>。この『南紀徳川史』所載の御拝領御駕籠については、江戸時代の風俗事物類書である『守貞謾稿』「駕車 後巻之三」<sup>7)</sup>所載の、徳川將軍家が使用する、溜塗り・総網代・棒黒塗りという仕様に合致し、実際に將軍家から拝領したとの記録がある。拝領後に改修（無双窓を簾に改変）したとの記述があるため、紀州徳川家で使用された可能性があるものとして、今回の再現対象とした。

火消行列については、「卷之百四十九 服制第三 服飾図式」の「出火出場行装」「御中間看板」「御抱鳶頭万右門長半纏」等を主に参照した。

#### 4. 歴史体感プログラムの内容

##### (1) 『南紀徳川史』に基づく紀州藩に仕えた人々の再現

『南紀徳川史』の記述に基づき、江戸時代の紀州藩の家臣・中間（奉公人）が和歌山城で働く様子を再現するものである。

令和元年度に、火消役・中間の装束製作、令和2年度に火消役の実演、令和3年度に火消道具の製作、火消役・中間の実演を行う計画である。

実演は令和3年1月10日に、史跡和歌山城内のイベントで、消防出初式の中で実施した。消防団の分列行進の先頭で、火消行列（先手者頭、若党、中間4人、鳶2人）として実演を行った。今年度は、纏等の道具は未製作であったため、提灯、鳶口のみを携帯した。また掛け声等は不明であったため、各地の火消行列や梯子乗り等で使用される江戸木遣り唄を背景に流した。

今回は消防出初式自体が新型コロナ対策のため無観客実施で、消防団員等の関係者約1000人の前での披露となり、実演の様子は動画配信とした<sup>8)</sup>。次年度以降も、今回同様の出初式の行進中の火消行列として実施予定である。

実演以外では、展示、着付け体験等で活用予定で

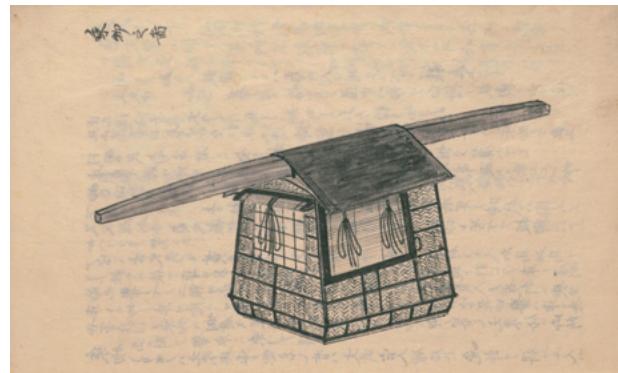


図6 『守貞謾稿』「駕車 後巻之三」  
(国立国会図書館デジタルコレクション)



図7 『南紀徳川史』「卷之百四十九 服制第三 服飾図式」出火出場行装 (松坂市所蔵・提供)



図8 同 御中間看板



図9 同 御抱鳶頭万右門長半纏

ある。

##### (2) 徳川家関係行列図に基づく和歌山城の大名行列の再現

江戸時代の紀州徳川家関係の行列図と『南紀徳川史』の記述に基づき、大名駕籠（男乗物）・駕籠者



図10 和歌山市消防出初式 火消行列再現



図11 火消役装束

等の衣装・道具を製作し、大名行列を再現するものである。

令和元年度に、大名行列の駕籠者の装束製作、令和2年度に大名駕籠の製作、令和3年度に行列道具等の製作を行う計画である。実演は、史跡和歌山城内・周辺のイベント時（紀州踊りぶんだら節等）で予定している。

実演以外では、展示、着付け体験等で活用予定である。

## 5. おわりに

以上、史跡和歌山城における「和歌山市の文化財を活かした歴史体感プログラム事業」の実施状況を述べてきた。和歌山城ならでは、という特色を充分に活かす活用については、今後まだ検討の余地がある。今回のプログラムを通じて、市民を始めとして和歌山城を訪れる多くの人々に、和歌山城の魅力をより印象付けられることを期待している。

### 【補註および参考文献】

- 1) 事業については、和歌山市と一般社団法人和歌山市観光協会で構成する「和歌山市歴史体感プログラム活用推進協議会」で実施。再現内容については、有識者を交えた検討部会で検討を行った。
- 2) 堀内信編 1970-1972『南紀徳川史』第1冊～第17冊、名著出版
- 3) 閲覧・掲載使用に際し、宗教法人東照宮のご許可を得、写真撮影は和歌山県立博物館 前田正明氏にご協力頂いた。記して謝したい。  
『南紀徳川史』「卷之百四十六 典礼第二 御登城御参詣及び御行列ニ関スル図式」のみ
- 4) 閲覧・掲載使用に際し、松坂市教育委員会のご許可を得、写真撮影は和歌山市和歌山城整備企画課 川嶋美貴子氏にご協力頂いた。記して謝したい。  
『南紀徳川史』「卷之百四十六 典礼第二 御登城御参詣及び御行列ニ関スル図式」、及び「卷之百四十九 服制第三 服飾図式」
- 5) 東京国立博物館デジタルライブラリー  
<https://webarchives.tnm.jp/dlib/>  
『南紀徳川史』「卷之百四十九 服制第三 服飾図式」
- 6) 津山藩松平家所用男乗物については、江戸東京博物館のご協力を得、同館所蔵の体験用複製品を参照した。その他の類例については、秋田公立美術大学落合里麻氏からご教授賜った。記して謝したい。
- 7) 喜田川守貞 1853『守貞謾稿』  
国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://www.dl.ndl.go.jp>
- 8) 和歌山市公式YouTube  
「和歌山市の文化財を活かした歴史体感プログラム」  
<https://www.youtube.com/watch?v=LWFUB-V3ges>